

ひなゆめファンの止まり木

合同小説本 Vol.01

目次

(著者名は敬称略)

ドラマを見終えて	著者：RIDE	3
世界で・・・	著者：みつちよ	10
僕の大きな黒い傘	著者：彗星	14
一度の出会い、一生の願い	著者：きは	23
著者あとがき & メッセージ		48
編集後記		52
奥付		52

本書は、「ひなゆめファンの止まり木」における
第1回クイズ大会（2013年5月5日）にて
上位を取った方々による、合同小説本です。

公開サイト：ひなゆめファンの止まり木

<http://soukensi.net/perch/>

クイズ企画の趣旨説明と結果ページ

<http://soukensi.net/perch/sp/2013gw.htm>

ドラマを見終えて

著者…R I D E

ここで、画面が切れた。

『台湾版ドラマ、ハヤテのごとく 最終回放映会』

僕はいつまでも……

お嬢様の……

借金執事です……。

見つめ合うナギとハヤテ。

レンタルビデオタチバナの一室。

ここに全員が集まり、台湾版ドラマを一举に見ていた。何故俺ん家でやる！と、営業妨害になるからワタルは止めたのだがここなら映像器具などが揃っていいという見解から、ムラサキノヤカタよりはいい環境だと言うナギたちに押されて結局は自分も一緒になって見ている。まあ、少なからず興味があったということは本人も口にしてはいなかったが。

そして今、最終話のラストシーンが流れ、ドラマが終わったところだった。

しばらく皆黙ったままだった。感動の余韻に浸っているのだろうか。

「いやー、中々いい作品だったな」

最初に口を開いたのは、ナギであった。

「台湾でドラマやるというから不安だったが、結構面白かったではないか。なあハヤテ」

「そうですね」

ハヤテも笑顔でナギに頷く。

「結構原作を踏襲していたしな。身分を超えて愛し合う二人が……」

「そうでしたっけ？」

何かがずれている二人。

「数々の試練に愛を深めあう二人なところが特に……」

「合っていますか？」

そのずれは、大きな衝撃となつてその身に返つてきた。

…ハヤテ一人に。

「まあ、ある程度の不安は存在していたがな」

ナギからの一撃をくらつて倒れているハヤテをよそに、ナギは評論家のように語り続けた。

「日本のコミックを韓流ドラマにするのは、シ〇イハンターのようにイマイちな評価が出てしまうのではないかと思つていたが、大体原作通りで良かったではないか」

設定年齢が大学生と若干違ふところもあったが、ナギは満足していたようだ。

「おいおい、シ〇イハンターだけで比較するのは失礼だぞ」

そう言つて口を挟んできたのは、ワタルだった。

「他にも花よりとか、色々あるだろ。これがよい出来だ

つたつていうのは賛成だけだな」

「そうだろう、そうだろう」

レンタルビデオ店の店長として、映像メディアにはうるさいワタルがここまで称賛しているのだ。何かの鼻屑が入っていたとしても、これはこれでいい出来なのだろう。

「ただ、少し気に入らねえのは……」

そこでワタルはちらりとナギを見てから再び口を開いた。

「なんで婚約者というだけで、俺がナギに片思いしているという設定にされたつてことだな」

「なんだおまえ、私の何が不満だ？」

ワタルの態度がなんとなく不快で、ナギは口を尖らせる。

「ありまくりだ！ どうあつたらこんなワガママな女に惚れていると捉えられるんだ！ ドラマの設定とはいえ納得いかねえ！」

「なんだと！」

途端に何か言い返そうとするナギだが、それを抑えて皮肉で応酬した。

「フン、だが惚れているのになかなか言い出せず、告白しても時すでに遅しで振られるといったようなヘタレっ

ふりは原作通りではないか。そのところはよく再現できたと思うぞ」

「うっ…そ、そんなことは…」

自分がヘタレだということを薄々自覚しているからか、強く言い返すことができないワタル。ナギを睨むことしかできなかった。

「よしなさいよ」

そんな二人の仲裁に入ったのはヒナギクだった。

「そうやってドラマのようにケンカし合っていると、文句いっても説得力無いわよ」

それを聞いてワタルは黙ったが、ナギは何か言いたいことがあるようでじっとヒナギクを見ている。

「なによ、なにかあるの？」

その訴えるような目がなんとなく気になり、ヒナギクは聞いてみた。

「いや、おまえは文句ないのか？」

「文句って？」

何かあったのかと頭を巡らせるが、ヒナギクは思いつかない。そんな彼女に、ナギは尋ねた。

「だから、ハヤテに振られてワタルといい感じになったってことだ」

ヒナギクとワタル。全くと言っていいほど接点のない

二人が仲良くなっていくというのはこちらとしてはなにか違和感があるというか、おかしい感じがするのだ。斬新ともとれるかもしれないが。

「ああ、そのこと」

しかしヒナギクは、あっさりとした感じで答えた。

「しょうがないじゃない。ドラマで原作通りやるというのは色々難しいものだから、多少設定が違ってきただけいいじゃない」

「しょうがないじゃない、で済まされませんよ！」

「そうだそうだ！」

割とクールなヒナギクだが、そこへ異論を挟んできた者が二人。

「歩に、美希」

普段はヒナギクに友好的な二人が、今はヒナギクに怒り剥き出しで絡んでいる。

「ど、どうしたの？」

流石にヒナギクも、これには戸惑うばかりであった。

そんな彼女に、歩と美希は畳みかけるようにヒナギクに迫る。

「ハヤテ君と元同級生って、元は私の設定じゃないですか！それがヒナさんの設定にされて、私が出ないなんて不公平ですよ！」

「そうだ！髪につけられたガムを取ってもらったという、私の過去まで取って！いくら人気投票で常に一位でも、ここまでやることはないだろ！なあ！」

そう言って美希は親友である理沙と泉の二人に同意を求めるが。

「あ、あれ…？」

美希は一瞬言葉に詰まってしまった。

「り、理沙…？泉…？」

それもそのはず。二人は冷たい目をしていた。理沙はともかく、いつも笑顔の泉までもが恐らくは初めて見せる表情は、美希だけでなくこの場にいる全員を黙らせるには十分であった。

「ちよい役とはいえ、一人だけドラマに出ている奴が何を言っているんだ…！」

「あのぐらいいの出番だったら、私たちも出して欲しかったなあ…！」

自分と理沙、泉の間に見えない大きな亀裂で別れているように感じる。

それまでずっと一緒に。初等部からずっと良好に続いた仲に、終わりが来たように思えた美希であった。

「不満なら私たちにもありますっ！」

理沙と泉を皮切りに、皆それぞれの不満を爆発させた。

「私、なんであんなに歳増えているんですか!?!」

まず口を開いたのはサキだった。

「私まだ二十歳ですよ！お見合いだってしたんですよ！ピチピチなんですよ！」

何気にマリアのセリフを使っているが、本人は構わず続けている。

「まあドジがなくなっって、若のお世話がきちんできて気配りもできて…！」

そこまで言ってサキは気づいた。

「あれ、私有能になっていませんか？私ドラマの方がいいのでしょうか？」

一人葛藤し始めたサキ。そんな彼女をほっといて、次は伊澄が口を開いた。

「私は、どうして男なのでしょう…？」

ここで賛否両論が一番多そうなの、いや恐らくは批判が多そうなのに触れてきた。

「いくらなんでも、これはないかと思うのですが…！」

今にも泣きそうな調子で伊澄は語る。他の皆も、伊澄に気を遣ってかあまり口を開こうとはしない。

「取ってかわれたというのは、私も同じですよ！」

そう言って伊澄に同調してきたのは、アテネであった。

「私、このドラマではマリアさんに役を取られたも同然

じゃないですか」

このドラマではマリアとアテネは密接な関係にある。詳しいことはここでは述べられないが、とにかくドラマでのマリアは見た目でもアテネを意識したものとなっている。そのためアテネがキャラを取られたというのは最もかもしれない。

「そのところどうなんですか、マリアさ…」

文句なんて程ではないが、何か一言申してやろうとアテネはマリアの方を振り向く。

が、アテネはそこで口を噤んでしまった。

「なにか？」

マリアはいつもと変わらぬ笑顔でいた。邪気は感じられない。しかし何故かこちらが疾しく思えてしまうような、そんな無垢な笑顔で。

「…いえ、なんでもありませんわ」

アテネも、マリアに対して何か悪いと思ったのか口を閉ざすのであった。変わって今度はマリアが自分の意見を述べてきた。

「それよりも私としては、何故メイド服がないのか疑問でしたわ。台湾にはメイド服というものがまだ浸透していないのでしょうかね」

そっちかよ！と思わず突っ込みたくなってしまった。

メイド服に何かこだわりがあるのだろうか。

「けど、出番がなくなったキャラが再び注目されるきっかけにはいいんじゃないですか？」

場の空気を変えるかのようにそう言って、ハヤテは氷室と大河の方を向いた。

「氷室：花、もっと増やした方がいい？」

「お願いします、タイガ坊ちゃん」

その二人は、ある作業をしていた。大河はいそいそと大量の花を手持ちのかごの中へどんどんと入れていき、氷室は薔薇を手を持って、香りを嗅ぐような仕草をしていた。

「…あの、お二人は何をしているんですか？」

二人の行動の意図が読めず、皆の心情を代表してハヤテが問いかけた。

「ああ、僕たちドラマでは結構出番があったよね」

「ええ、氷室さんは僕のライバル的なポジションにいましたよね」

彼もまた、原作に比べれば優遇されているだろう。

「出番が多いのは喜ばしいんだが、なんか薔薇がなかったからね。だから原作で再登場した時にはその時の分まで多く薔薇を撒き散らそうと思って、今その準備をしているところさ」

おまえもそのこだわりはなんなんだ！とは再び心の中だけにしまっておく。

そもそも、再登場はあるのだろうか？

「感心しますね、氷室君」

そう言ってきたのは野乃原だった。

「私も一話だけの登場とはいえ、あの坊ちゃんの指導はまだまだ甘いと思いましたがね。再登場の際はあれよりも厳しめにいきますか」

「いや：野乃原さんのあれはリアルで見ると結構きついかと…」

実際、見ていて恐くなり、引いていました。

まるで虐待であるかのように…。

「しかし、盛り上がれましたね」

「うむ、それだけ作品がよいということであるな」

ハヤテやナギは満足していた。批判もあるが、これだけ話があるということはそれだけ作品としてできているということだろう。

「では、そろそろお開きということでは…」

「ちよっと待てえい！」

それを大声で制止した者が一人。

「うちかてまだ言いたいことあるっちゅうのに、なにおしまいにしてしようとしてんのやあ！」

自分たちの知っている中で、関西弁を使うのは一人しかいない。

「どうしたんだ、咲夜？」

「どうしたやない！」

ナギが面倒くさそうに振り返ると、そこには如何にも憤慨していますと言わんばかりの咲夜が。

彼女は捲し立てるような勢いで不満をぶつけた。

「うちもヒロインの一人やで！なのにドラマでは出番なしってどういうことや！」

考えてみれば、ナギの親友というポジションにいて、それなりに人気もあるのに出番がないというのは有り得ないだろう。ドラマ化で一番不遇を買ってしまったのは、彼女かもしれない。

しかし、ナギと伊澄からの返答は冷たかった。

「笑いを取ることに優先する関西人じゃ出れないんじゃないのか？」

「咲夜は私と違って、色々駄目だから…」

「なんやとう！笑いのどこがいけないっちゅうに！」

咲夜の怒りは、ただ煽られていくばかりである。見かねたハヤテはフオローに回った。

「ま、まあその辺は原作の方でもっと出番が増えるかもしれないということでは…」

「せやかて、最近のうちの出演ほとんどないんやで？」

不安がる咲夜。それは他の皆も同じことを思っているだろう。この先どうなるか？

「大丈夫ですよ」

しかしハヤテには自信があった。

「ドラマでもハッピーエンドになったんですよ。原作の方も、これだけ素敵な人たちがいるから絶対になります」
皆、ハヤテの言葉を聞いて不思議と自信がわいてくる。

「そうだな…」

ドラマと同じような、いやそれ以上の物語にしよう。
全員そう誓うのであった。

「あれ？」

男がやっと会場入りできた時には、既に誰もいなかった。
た。

「そんな、乗り遅れたあああつ!？」

三千院家執事長、クラウス。影は薄い、彼もドラマに出ています。

世界で・・・

著者…みつちよ

『世界で一番好き』って言葉は、よく考えると曖昧な言葉よね」

「えっ？」

「世界で・・・」

あ、みなさんこんにちは

僕は綾崎ハヤテです

今さっき、生徒会室に彼女のヒナギクさんを手伝いに来たのですが・・・

(生徒会三バカ娘は、相変わらずのサボりです)

「ね、そう思わない？」

彼女は入ってくる僕にいきなり疑問を投げかけて来たわけです

「あ、あの・・・ヒナギクさん、言ってる意味がさっぱり分からないんですけど・・・？」

「だから『世界で一番好き』って言葉は、結局二番三番がいるかもしれないって言葉でとても曖昧な言葉だと思

わない？」

「あっそういう意味でしたか」

納得、確かにドラマやアニメでよく使われる言葉だからあまり気にしなかったけど言われてみればそうかもしれない

でも・・・

「なんでいきなりそう思ったんですか？」

そう、なんで彼女は唐突にそんな疑問を僕に投げかけてきたのか

すると彼女は少し困ったような顔をして「枚の手紙を差し出した

「これ、なんだけど・・・怒らないですよ？」

「？」

いったい何に怒るなど言っているのか分からなかったがとりあえず了承をとってから内容に目を通す

「・・・。あ、あの、これ、もしかしてラブレターじゃないですか？」

手紙の内容は『放課後に体育館裏に来てください』などあきらかにラブレター

未だにこんな古いことする人がいるのかと驚いたが実際にいるので結構ポピュラーな告白の仕方なのかもしれない

しかし・・・これは普通女性から男性に向けて使うやり方なのでは・・・？

いや、この考え方も古いのかも・・・

僕が恋愛観について真剣に考えていると彼女は少し心配そうに僕の顔を見上げてきた

「ハヤテ君？大丈夫？」

「え、あ、はい」

彼女の声で一気に現実に引き戻される

「あの、それで・・・これは誰から・・・？」

あまり考えないようにしていたが、とうるかそれをごまかすための現実逃避だったのかもしれないが彼女にラブレターが来たことは紛れもない事実なので一応彼氏としては聞いてみたい

「え、あ、うん。同学年の子で差出人はそこに・・・」

彼女の美しい指の先には『2年D組』と書かれたあとに名前があつた

この人、確か野球部の副キャプテンの人じゃなかったっけ？

朝風さんたちが『チャライけどかつこいい』『ブロマイド売り出せばもうかる!!』とか言ってた気が・・・

「ハヤテ君？は・や・て・く・ん!!」

はっ、また僕は現実逃避に走っていたらしい

「あ、すみません。それで、その・・・」

「もちろん、断ったわよ。『彼氏がいるから』って。でもその時に・・・」

(昨日の放課後)

「ごめんなさい。私、もうお付き合いしている人がいるの。だからあなたとは付き合えないわ」

「あなたの彼氏って綾崎ですよ？あいつのどこがいいんですか？ルックスや成績だってオレの方が上だし、それに桂さんは知らないでしょうけどあいつ親に捨てられて借金まであるんですよ？そんな奴とこの先付き合ってたっていいことないですよ」

この男はどこで聞いたのかハヤテの過去を知っていた

ヒナギクは男が言う言葉を俯いて聞いていた
しかし、内心はものすつごくお怒りであつた

そりゃあ、金棒を持った鬼が泣いて逃げるくらい・・・それをショックでしゃべれないものだど勘違いしたのか男がヒナギクを抱き寄せて耳元で「オレはあなたを幸せにできる。世界で一番あなたが好きだ」とか囁いてしまった

完全な自殺行為

ぶちっ

ヒナギクの何かが外れた音

ヒナギクはあくまでも笑顔で、そして無言で正宗を召喚しその後は・・・

男が大変な事になったとだけ伝えておく

回想終了

「それで僕にそんな質問をしてきたわけですか」

「そういうこと。それで気絶した男に言ってやったわ。

『ハヤテ君の方が何百倍もカッコいいし私を幸せにできるのはハヤテ君だけ。たとえあなたが世界で一番好きなのが私だとしてもね』って。まっ、気絶してたから聞こえなかったと思うけど・・・」

ヒナギクさんは自分で言っただけで恥ずかしくなったらしく顔をそむけた

「ねえ、ハヤテ君はどう思う？」

ヒナギクさんは再度僕に聞き返す

その姿がかわいくて、可愛すぎて

「ぼくも、同じ意見です」

だから

「僕は世界中でたった一人、ヒナギクさんしか愛してま

せんよ」

たまにはこんなキザでカッコつけた、でもしつかりと自分の気持ちを伝えてみようと思った

「もう、バカ・・・」

ヒナギクさんは真っ赤になった顔のまま

「私も、世界中でただ一人ハヤテ君しか愛してないよ」

その顔は反則ですよ・・・ヒナギクさん

僕はヒナギクさんを抱き寄せる

・・・今日は仕事に手がつかないや

余談

野球部の男子はヒナギクの次はハヤテにやられて二週間、学校に来なかった

僕の大きな黒い傘

著者…彗星

手を止めた。

思わず苦笑が漏れる。

雨が降っていた。

どんよりとした空を見上げ、僕はため息をつく。

「参ったな……」

余りの寒さに、暖をとろうと近くにあったコンビニに入ったのが間違いの始まりだったのかもしれない。コンビニに入って雑誌の立ち読みをしている間に降り出した雨に立ち往生させられる羽目になったのだ。

家はすぐそこだが、濡れて帰るのも傘を買うのも癪だった。

ちらつ、と店内を見回す。

——折角だから、肉まんを買って帰ろうか。

レジ横の肉まんが目につき、ズボンのポケットに入っている携帯に手を伸ばす。ダイヤルを回した辺りで僕は

僕は、誰に電話しようとしていたんだ？

肉まんの種類を聞く彼女、一緒に肉まんを食べてくれる彼女はもう居ないというのに。

“じゃあね……”

彼女の言葉が耳に響いた。

——ああ、確かこんな風にじとじとした雨が降ってたっけ。

僕の中の時が止まったあの日も、彼女の中の時が止まったあの日も——

【僕の大きな黒い傘】

「ねえ、ハヤテ君」

彼女は自慢の桃色の髪をサアツとかきあげながら僕に話しかけた。

桜の季節はとうの昔に過ぎ去ったが、その瞬間だけ満開の桜の下に居るような錯覚を受け、思わず僕の鼓動は速まる。

「何？」

やっとの思いでそう答える。

「雨、だね」

「へ？」

窓の外を指さして、彼女は微笑んだ。

見たところ、特に変わった雨でもない。逆に夏の暑さに加えてこの湿気だ。うっとしい事この上ない。

「……そうですね」

「うん。ハヤテ君は今日傘持ってきた？」

「はい。持ってきましたけど……それがどうかしたんですか？」

「私、傘忘れちゃったんだ」

彼女はそう言うのと今度は嬉しそうに、やけに楽しそうに笑った。

その言葉で、僕は彼女の言わんとする事を理解する。

確かに僕の傘は大きいし、2人ぐらい余裕で入るだろう。けれど、僕はどうか？ そんな余裕があるかと聞かれれば答えは決まっている。

NOだ。

「だから、送ってくれるよね？ ハヤテ君」

「……で、でも！ 相合い傘なんて！」

「デリカシーの無い男……」

「はうっ！ ……で、でも、その、ヒナギクさんスゴクカワイイから相合い傘なんてしたら幸せすぎて倒れちゃうって言うかなんて言うか……」

「あう……」

「う……」

沈黙。

そして、

「あ、あの」

重なる声。

また、沈黙。

雨が地面を叩き跳ね返る音だけが耳に届いた。

「見てごらん、泉。教室のど真ん中でラブコメを展開しているカップルがいるよ」

「初々しいね☆」

その沈黙を破ったのは、ジト目で僕達を睨みつける花菱さんだった。隣の瀬川さんは恥ずかしそうに俯いている。

「あ、いや、その！ すみません……」

「何で謝るの？ 全く、そんなんじやハヤ太君にヒナは任せられないな」

「ちよっと待ちなさい。私は美希のモノじゃないわよ？」

「ハヤ太君のモノだって？」

「ふえっは、り、理沙は、な、何言ってるのよ！」

「ヒナちゃん顔真っ赤だよ？」

花菱さんの後ろから朝風さんも顔を出した。

ニヤニヤした顔で楽しそうにしている。

「我らが生徒会長様は三千院家執事と仲良く下校なさるとして……」

「早く教室を出ていってもらいたいのだが？」

「私たちが帰れないよ」

花菱さん達の言葉で僕は辺りを見渡す。確かに、何時の間にかクラスメイトは居なくなっており、そう言った瀬川さんの手には教室の鍵が握られていた。

「ああ、ごめん。美希。帰りましょう、ハヤテ君」

「あ、はい」

教室を出て、僕達は並んで玄関へと向かった。

彼女は僕の左側の半歩分前を歩いている。

「……急に笑い出したりしてどうしたの？ ハヤテ君」

彼女が訝しげに僕の方を振り返った。思わず、笑ってしまっていたようだ。

「いや、いつもだなあ……と思って」

「へ？ 何が？」

「ヒナギクさん、いつも僕の少し前を歩いてるんですよ」

「あ、ああ……別に深い意味は無いわよ？」

「きつと、余程の負けず嫌いなんですね」

「な、何でそうなるのよ！ 深い意味は無いって言うてるでしょ！」

「だから、つい僕より前を歩いているんですよ〜」

「ち、違うって言うてるじゃない！」

そんな会話をしながら、下駄箱に着くと、彼女はさも当たり前のように体を寄せてきた。

女の子特有のモチのように柔らかい感触が僕の体に伝わる。しかも、シャンプーの匂いだろうか。

仄かな香りが僕の鼻孔をくすぐった。

「ヒ、ヒナギクさん！」

「……何？」

「そ、その体が……」

「え？ だって、こうしないと傘に入れないじゃない」

何がおかしいの？ とでも言いたそうなキョトンとし

た表情の彼女。

それはそれで可愛い。確かにバカみたいに破壊力がある。正直、今にも天まで舞い上がるような気持ちだ。――が。

「……本当に傘、忘れたんですか？」

「あ、ああ当たり前じゃない！ わ、私が相合い傘をしたからって天気予報で降水確率90%って出たのに傘を持ってこない訳がないでしょ！ だ、だからこれは仕方なく！ 仕方なくだからね！ 分かっている！」

「は、はあ……」

じゃあ何でそんなに慌てて、今日の降水確率まで知ってるの？ って聞いたら怒るだろうなあ……。

そう思いながら、僕は傘を開いた。

別に相合い傘がイヤな訳でもない。むしろ僕だって嬉しいぐらいだから、彼女のバッグから覗いてる折りたたみ傘の事は黙っておこう。

「じゃあ、行きましようか」

「うん！」

そうやって、彼女は――

その時は、確実に、そして思わず目を細める程の笑顔で頷いたのだった。

☆

「あれ？ そつちにヒナギクさんの家はありませんかよ？」

校舎を出て暫く。

ヒナギクさんは分かれ道でヒナギクさんの家からお屋敷からも反対方向に曲がった。

「良いの良いの。……たまには寄り道でもしない？」

「は、はあ……」

僕はチラリと時計――こないだの誕生日に、お嬢様がプレゼントしてくれた腕時計を確認した。短針が指すのは3と4の間だ。時間に余裕はある。

「じゃ、行きましようか」

「……………」

「ヒナギクさん？」

「うん……そうね。じゃ、早く行きましよう」

そうやってやはり、少し僕の前を歩く彼女の髪は――少しだけ。ほんの少しだけ悲しそうに揺れていた。

☆

「87、88、89、90、91……」

オススメの場所があるの。彼女がそう言って僕を案内したのは町外れにある高台だった。

僕は一段目から律儀に数えるヒナギクさんを眺める。

……やはり、少し――

「96、97、98、99、100……」

「へへ、この階段ってピタリ百段何ですね」

「……うん。ちょうど百段で終わり」

「……ヒナギクさん？」

「……うん。やっぱり今日のヒナギクさんは元気がない。」

「何？」

「あ、いえ……。少し、元気がないように見えたので」

僕がそう言うと、ヒナギクさんは少し口を嚙み、まだシトシトと雨の降る空を見上げてから口を開いた。

「ねえ、知ってる？」

「……何がですか？」

「今日が私たちが付き合い始めて百日だって」

「——それって！」

ちようど百段で終わる階段。

僕達がつきあい始めてちようど百日目。

——その言葉の意味することは。

「今日で百日目。私とハヤテ君とで一歩ずつここまで登ってきた。だけどね……」

私は心の狭い女だから。私は欲望にまみれた女だから。ヒナギクさんはそう言って、高台から見えるこの街の風景へと目を向けた。

「……だから。今日が私とハヤテ君がこのまま終わるか、この空へと羽ばたき出せるかの分かれ道」

ねえ……聞いてる？

ヒナギクさんの、言葉。……ああ、分かった。

ヒナギクさんは続ける。

「私とナギ、どっちが大切？」

「っ……！！！」

分かった。いつかはこうなるんじゃないかって。

僕が一人である限り、選べるのは一人。彼女と、お嬢

様。

僕はいつか選ばなければならなかった。

だから。次に彼女の口から紡がれる言葉は——

「ハヤテ君、私だけのモノに……なってる」

——彼女にとってどれだけ残酷だったか。
彼女は聡明だから。

それでいて、誰よりも優しいから。
だからこそ、なればこそ。その言葉の持つ意味がどう
言うことか、分かっていったのだ。

「……………」

「ハヤテ、くん……」

けれど。僕には選べない。

「……やっぱり。やっぱりね。分かってた。分かってた
のよ？ こんなこと言っ
てもアナタが苦しむだけだって」

だってアナタは優しいもの。

優しすぎて、他人の幸せを踏みにじることができない。
誰かが不幸せになると分かっているのに、それを選択す
ることは、アナタにはできない。でも……

彼女はクルリ、と振り返り、続ける。

「でもね。私はそんなアナタが大好きだから——もう、
アナタとはいられない」

「……え？」

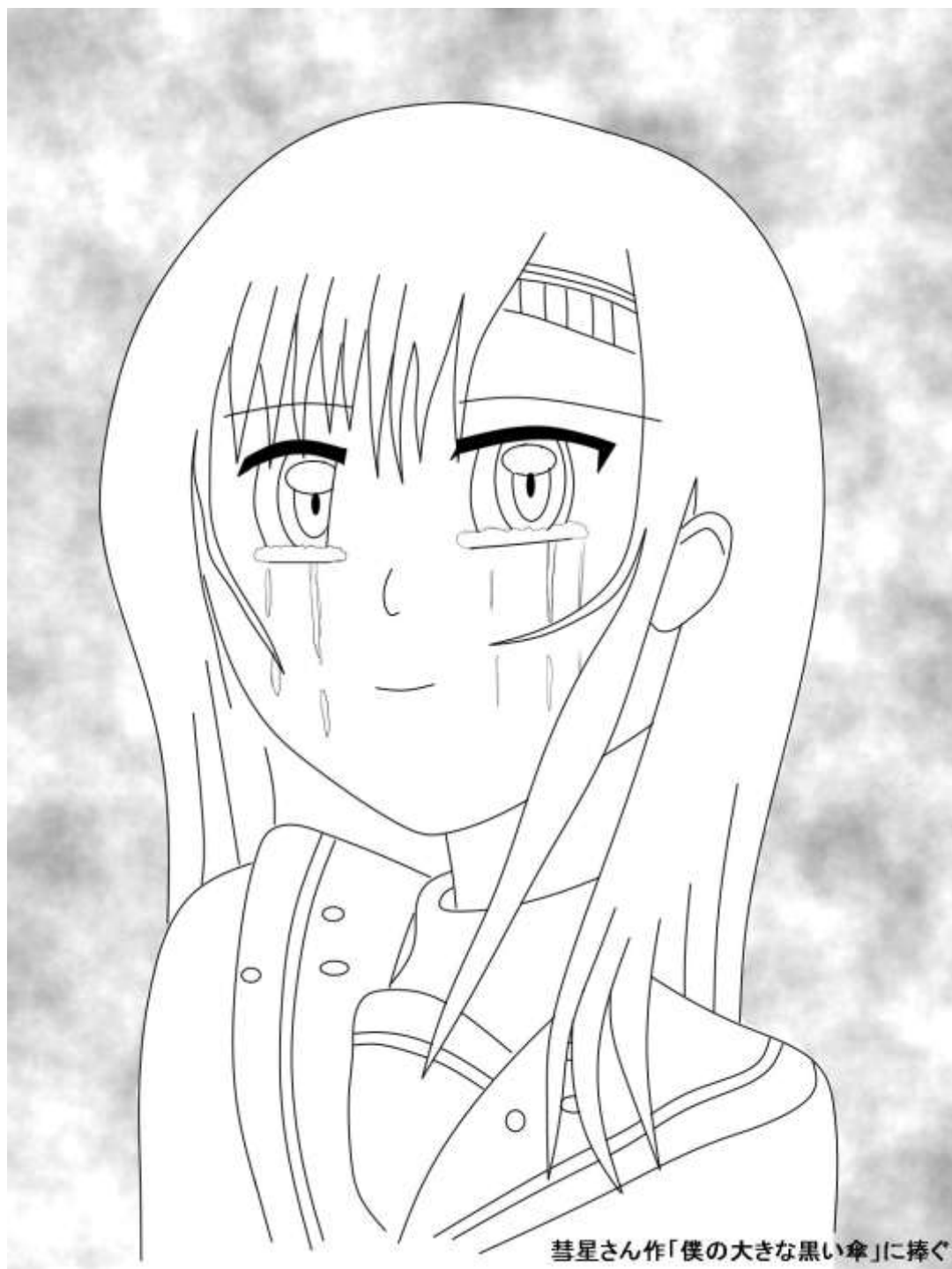
「私が居たら、アナタは幸せになれない」

静かに彼女は微笑む。

——そして。私はアナタの笑顔が大好きなもの。

“じゃあね……”

風が、吹いた。



彗星さん作「僕の大きな黒い傘」に捧ぐ

☆

「お客さん。雨、止みましたよ？」

そんな、店員さんの言葉で僕は我に返った。
その言葉通り、既に空には晴れ間が覗いている。

——通り雨だったのか。

「お客さん？」

「あ、いえ、ありがとうございます。じゃあ……」

僕は、時計へと目を向ける。

針が示すのは三時を少しばかり過ぎたころ。

「店員さん。肉まんを三つ。それと傘、それも一番大きいヤツを」

「え？ でも、雨は止んでますけど……」

「まだ——。まだ、降ってるんです」

僕の時計は、未だに一秒たりとも進んでいないのだから——

そう、口の中で言葉を転がす。僕は、少しだけ晴れ間
が覗く空の下、大きな傘を広げた。

一度の出会い、一生の願い

著者…きは

月は、地表にあるものを遍く照らし給う。

たとえその光が太陽から賜ったものであったとしても、一度東の地平線から顔を覗かせれば西へと隠れていった太陽に代わって、遙か上空から地表に明かりを灯す。

天体の行動には、気ままな例外はない。

広大な海であろうが。峻険な山であろうが。そして、その山に君臨する中世の古城を基にした豪邸であろうが。月は地上を俯瞰して、分け隔てない光をもたらし続けている。



蒼白の月光が窓を透過して、三千院家本邸の廊下へと降り注ぐ。一部透過できなかった光は影となって、石畳の廊下に格子状の描画を映し出していった。

静寂に包まれていた空間に響き渡る二つの足音と一つの息遣い。その息遣いは、足早に歩く壮年の男性ではなく、その男に追いつがろうとする少女から出されていた。

大人と子供では、歩幅が大いに異なる。部屋から廊下に出た時は肩を並べて歩いていた二人も、距離に比例してその差が開くばかりだった。

少女は紫紺のドレスの裾をたくし上げ、やむを得ず走り出す。栗色のポニーテールが激しく左右に揺れ始めた。

「——さん。待って、ください」

前方にいる男を呼び止めようと、少女は声なき叫びを上げる。彼女はすでに息が上がっていて、呼吸音はかすれた声を上回っていた。

「まっ——」

呼び止めることを諦めた少女は、男に追いつかんがために走る速度を上げた。しかし、懸命に走ろうとするからこそ、身体が追いつかなかった。少女は足がもつれて身体のバランスを失い、前のめりに倒れた。両手は塞がっていて、無防備な状態の胸を廊下に激しく打ち付けてしまう。

少女は痛みを無視しながら、前方を見据えた。歩みを止めることはつまり、男が遠ざかっていくことを決定づけることでもあった。

そして、必死だった。少女は歯を食いしばり、耳をつんざくほどの大声を上げた。

「待って！ クラウスさん！」

男——クラウスは立ち止まって、少女の方へと振り返る。顔は驚愕の色を帯びながら、クラウスは少女のもとへと駆け寄った。

「どうしたんだ、マリア？ 何があつたんだ？」

「何って……クラウスさんが私を置いていこうとするからです。私は、もうすぐで九歳の子供ですよ？ やすやすと大人に追いつけられませんか？」

マリアは息も絶え絶えな状態になりながらも、クラウスを糾弾した。彼女の瞳は怒りによって赤みが増しており、眉はつり上がって見事な逆ハの字を形成していた。

「いや、すまなかつた。パーティーに遅れまいと急いで、マリアのことを気にも留めなかつた」

クラウスが花柄のハンカチをマリアに渡す。視線をドレスの裾へと落とすマリア。月の光で照らし出された汚れを確認しながら、彼女はハンカチを使ってドレスの裾をはたき始めた。

ドレスをなるべく傷めないようにするマリアの行動に、クラウスは感心する。

「丁寧だな」

「当然です。このドレスはおじい様が用意してくださつたのですから」

澄ました顔でマリアは答える。沸々と込み上がって

た怒りは既に収まっており、今ではドレスを汚してしまつたことを気にして落ち込んでいた。そのような感情の機微に気づいたクラウスは、腰を落としてマリアの顔を正面から見る。

「そうか。それは、帝様にも申し訳ないことをしてしまつたな。後で——」

「——クラウスさん、何か聞こえませんか？」

クラウスの謝罪を半ば無視してマリアは会話を遮り、耳を澄ました。風を切り裂く音がするのを微かに感じ取つたマリアは、窓へと目を向ける。クラウスも彼女の動きに合わせた。

窓一枚隔てた先には、夜空に漂う満月があつた。その満月に重なっている黒い点があるのをマリアは発見する。

「あれは、ヘリですか？」マリアは黒い点を指差した。

「そのようだな。ここに来るためにはヘリコプターを使わなければならない。だから、あれもパーティーの招待客だろう。私達と同じで、遅刻をしたようだな」

クラウスはマリアの予想を肯定した。そして、窓から目を離して廊下の先を眺める。

「私達も急ぐとするか。行くぞ、マリア」

歩き出そうとしたクラウスの服の袖口をマリアはつまむ。振り向いたクラウスは、その意味を解しかねて首を

傾げた。

「また、『急ぐ』つもりですか？」

マリアは淡々とクラウスに尋ねる。その内容は質問ではなく、念押しであった。彼女の視線は、クラウスの良心を抉る。

彼女のただならぬ雰囲気を察したクラウスは、笑って自分の行動をごまかすしかなかった。

「じよ、冗談だ。今度はゆっくり行こうか」

クラウスは、袖口を掴んでいたマリアの手を握った。

そして、小幅で歩き出す。

マリアは満足気な表情を浮かべながら、クラウスの横をついて行った。



重厚な木製の扉から僅かな光が漏れている。観音開きとなつている扉と扉の隙間から出てきた一条の光は、廊下に出てくる影を二つに引き裂いていた。その扉こそ、パーティー会場の出入口である。

扉の傍に、一人の男が立っていた。黒服に身を包んだその男は、クラウスとマリアが近づいて来たのを見て恭しく一礼した。

「クラウス執事長。お疲れ様です」

「うむ。万事抜かりはないな？」

「はつ。執事長の的確な指示の賜物です」

クラウスの威厳に満ちた声に、男は白い歯を見せた。

業務連絡とも受け取れるやり取りを見上げていたマリアに、一つの疑問が浮かぶ。

「クラウスさんは、仕事をサボってここにいますか？」

「サボってなどいない！ ちゃんと私もマリアも招待されておる。ほら、これがその招待状だ」

クラウスは胸ポケットから一枚の封筒を取り出し、黒服の男に手渡した。男は封筒から一枚の便箋を取り出して、それを開いて内容を一読している。

マリアは男が持っている封筒の方に視線を走らせる。消印は、三週間前の十二月二日となっていた。他にも、

封筒の中央には「蔵白征史郎」と「三千院マリア」の名前が書かれている。そして、封筒の隅にある名前にも目に留まった。

その名前は、「三千院紫子」。

封筒の差出人であり、今回行われるパーティーの主賓である。

「確認いたしました。どうぞ、お入りください」

便箋を元に戻して封筒をクラウスに渡した後、黒服の男は扉に手をかけようとした。だが、マリアの質問がその男の動きに歯止めをかける。

「あの、『三千院紫子』とはどなたでしょうか？」

クラウスと黒服の男が互いに目を合わせる。二人共苦笑いをして、クラウスがマリアの質問に答えた。

「そうか。マリアが物心つく前に練馬にある別邸に引越されたから、知らないのも無理はないな。——紫子様は帝様の一人娘であらせられるお方だ。幼少の頃は私が専属の執事をしていた」

「私にとっては、お母様にあたる方ですね！」マリアは声を弾ませる。

「ま、間違っではないが……」

マリアの発言に、クラウスは戸惑った。マリアの嬉々とした表情を見て、彼は全否定をすることができなかつた。

クラウスの様子を見かねて、黒服の男は仰々しく咳払いをする。

「紫子様は、ゆくゆくは三千院家の次期当主となられる予定でありましたが、生まれつき病弱の身の上でありました。特に、旦那様を事故で失われた後のここ数年は、心労もたたつて入退院を繰り返されていたほどです」

肅々と語る男の声は厳かで、彼が心配している様はマリアにもひしひしと伝わっていた。

「ですが、ここ数週間は体調が優れているそうです。それで、数年ぶりに誕生日パーティーを開催することに至ったのです」

男の声色は明るくなっていく。それと対照して、マリアの表情は少しずつ暗くなっていった。

「あの、どうして私は招待されたのでしょうか？」

恐る恐る、といった間でマリアはクラウスに尋ねる。

見ず知らずの人から招待を受けるのは、彼女にとって少し後ろめたく感じた。

「それは、主催者である帝様のご配慮があったからだ。

これを機会に紫子様のことを知ってもらいたいのと、日々勉強とメイド見習いで頑張っているマリアに楽しんでもらいたい、とのことだ」

「そんな、過分なご配慮があったのですか……」

マリアは納得したつもりで呟いていたが、その言葉はどこか歯切れが悪かった。

男はそんなマリアを見て、ドアノブに掛けていた手を彼女の肩にそっと置いた。

「——クラウス執事長を始め、私達使用人は貴方の懸命な働きぶりに感銘を覚えていますよ。ですから、楽しんで

でもらいたいというのは帝様個人の意思にとどまらず、私達使用人の総意でもあるのです」

男はニコツと微笑んだ。彼の目尻には皺が寄っており、その笑顔が上辺でないことを物語っている。

「本当ですか？ クラウスさん」

「ま、まあ、たまには休みとかあったほうが良いだろう？」

上目遣いで見つめるマリアに、クラウスは顔を背けて明日の方を向いていた。白髪のオールバックに白いカイゼル髭を生やしているクラウスであったが、頬は少しだけ赤みがかった。

「それでは、どうぞ楽しんでいってください。パーティーは今のところ、ご歓談に移っていますから」

男はドアノブに手を掛けて、扉を引いた。眩い光が扉からとめどなく溢れている。

クラウスとマリアはその光に吸い込まれるように、パーティー会場へと入っていった。



あまりの眩さに、マリアは腕で目許を覆って怯んだ素振りを見せた。月明かりがあったとはいえ、暗いところ

で目が慣れていったマリアからすれば、パーティーの会場は文字通り輝いていた。

豪華なシャンデリアから放たれた光は、パーティーの招待客らが身に付けている宝石で乱反射してマリアの目に届く。まるで、朝焼けが照らす湖の水面を眺めているようなものである。子供にとってこの光景を直視するには、刺激が強すぎたのだ。

「眩しければ俯いておくが良い。じきに慣れる」

クラウスの忠告を聞いて、マリアは床に敷き詰められている赤色の絨毯を見つめることにした。絨毯の上では、数十個にわたる一本足のテーブルの影とそれ以上の数の人影が交差している。二つ以上の影が織り成すことで重なっている部分は、より色濃く映っていた。

マリアは視線を固定したまま、クラウスに手引かれて歩いていく。マリアの目が光に慣れた時に、くたびれた茶色の革靴が彼女の目に留まった。

もしかしてとマリアは思い、視線を上げていく。そこには、革靴と同じ色をしたズボンとベストを着ている老人が、片手にワイングラスを持ちながらニコリと笑みを浮かべていた。

「おじい様！」

マリアは声を張り上げた。すぐさまクラウスの手を振

りほどこいて、老人へ飛び込む。

「おお、マリアか！ よく来てくれたな」

「はい、遅くなりました……」

老人はマリアの頭を撫でた。ゴツゴツとした掌の感触に、マリアは目を細める。

「帝様。遅れてしまいました、申し訳ありません」

クラウスは老人——三千院帝に向けて頭を下げた。

「いや、こっちこそ招待客であるはずのお前に、準備のこととか押し付けてしまったからな。遅れさせることになってしまつてすまないと思つている」

「——私は招待客である前に、三千院家の執事長です。主に傳く身として、裏方の仕事を務めるのが本来の職分です」

一度頭を上げたクラウスは、帝に抱きついていているマリアを一瞥する。

「それよりも、今日はマリアも招待して下さいまして、ありがとうございます」

クラウスは再び頭を下げた。マリアは帝の身体から離れて、クラウスと同様に頭を下げる。

その光景を見て、帝は豪快に笑つた。

「気にするな。マリアにも私の一人娘のことを知つてもらいたかつたからな。今日は存分に楽しんで行きなさい」

帝の言葉に、「ハイ！」とマリアは元気よく返事する。しかしその一方で、クラウスは視線を至る所に動かして周りの光景を窺つていた。

「どうしたんじや、クラウス？」帝がクラウスに尋ねた。

「何を探しておる？」

「いえ、紫子様はどちらにいらつしやるかなと思ひまして……」

「ああ、あいつならあつちにおるぞ」

帝は振り返つて、会場の一番奥にあるテーブルを指差した。そのテーブルには、この会場における唯一の椅子が一脚設けられている。いわゆるお誕生日席であり、祝われるべき紫子が座つていた席である。

——が、その席には誰もいなかった。

「誰も座つていませんが……」クラウスはありのままの事実を述べた。

「ワシが手に焼くほど奔放な娘だからな。今ごろ会場内をぶらぶらしているのかもしれない。さて——」

帝は手に持つていたワイングラスをクラウスに渡し、二人から遠ざかるように歩き始める。

「おじい様、どちらへ？」不安そうな声で、マリアが尋ねた。

「主権者としてな、招待した財界のお偉い方とお話しな

ければならん。いわゆる、金持ちの宿命ってやつでな」

「宿命ですか……」

「そうだよ。主賓がいなくてもパーティーは成り立つが、主催がいなければ立ち行かなくなってしまうものだ。――ああ、招待客の中にも子連れで来ている人がおるから、年の近い子達と仲良くなるのも一っだぞ」

「マリアに告げた後、帝は近くにいた招待客と話し始め、そのまま人混みへと消えていった。」

「では、私たちは紫子様を探すことにしようか」

「クラウスがマリアに提案する。」

「そうしま――」

「――執事長！」

「マリアの同意に割り込んで、二人の元に一人の男が駆けつけてきた。入口の傍に立っていた黒服の男だった。」

「実は……」

「男はクラウスに耳打ちする。最初は頷きながら男の話聞いていたクラウスであったが、途中から笑顔が消えた。白い眉はぴくりと跳ね上がっている。」

「はあ！？ 相沢家の当主が裸漫談をしたがっている？」

「思わず、クラウスは怒鳴るほどの声量で声に出してしまう。マリアはその声に反応して、二人のやり取りをつ

ぶさに見ることにした。

「執事長、声が大きいです」男は声を潜める。「余興でやりたいと、別室にて全裸で待機しています」

「お前らだけでは何とかならんのか？」

「全裸状態で説得できるのは、執事長をおいてほかにございませぬ。パーティー中ではありますが、なにとぞ……」

「あのバカ当主め……」

「クラウスは悪態をついた。愛沢家の当主が粗相をしたとなれば、その家と親戚関係にあたる三千院家の名前にも傷が付くことにもなる。加えてこのパーティーは、三千院家が主催者として開かれているものである。信用の面でも失墜することは、火を見るよりも明らかな話であった。」

「今から行く。その部屋を案内してくれ」

「クラウスは男に先導することを促した。男は小声で礼を述べて、クラウスを案内する。」

「待ってください！ 私も参ります」

「マリアはクラウスを呼び止めた。メイド見習いとして何か手伝えればという気概が表情に現れている。」

「その姿を見ながらも、クラウスは首を振って自制を促した。」

「ダメだ。女の子には見せられない戦いが起こるから、そこで待つてなさい。すぐ戻る」

クラウドは笑顔を貼り付けてマリアを安心させようとする。しかし、その笑顔が歪んだものであることは、マリアの目から見ても容易に分かることだった。

だからこそ、マリアはクラウドと男の後ろ姿を見送った。



クラウドを見送ってから、既に十分は経過しようとしていた。

マリアはその間近くにある壁にもたれて、クラウドが帰ってくるのを待ちわびていた。クラウドの言った「戦い」は難航しているのだろう。マリアはそのような考えを巡らせている。

待ち始めた最初の頃は、自分一人で三院紫子を探しに行こうかとも考えていた。だが、あいにく彼女は、三院紫子を知らなかった。

「もし、その人」

マリアは声がした方へ目を向ける。その場所には、金

髪の少女が毅然とした姿勢で立っていた。金色の髪は、会場の光と相まって星空のごとく煌めいている。

「貴方ですわ、貴方。貴方は帝とよく一緒にいる娘でしょう？」

マリアを指差しながら、少女は彼女へと詰め寄っている。その足取りは優雅で、マリアは少女の行動に見入ってしまった。身長はマリアよりわずかに低い、身体から滲み出ている雰囲気は年相応のものではない。育ちが立派なお嬢様かなと、マリアは思った。

「沈黙は肯定ね。……まあいいわ。実は私パーティーに遅刻してしまって、今この会場に着いたところなの」

少女は首を左右に振って、周りを見るジュエスチャーをとる。頭頂部から一本飛び出た長い髪が、振り子のようによらりと揺れている。

「ですから、帝がどこにいるか全く分からなくて」

「——おじい様なら、あちらにいると思います」マリアは帝が消えて行った方向を指差す。「確か、財界の偉い人と話していました」

「助かりましたわ。どうも、ありがとう」

少女は礼を言ってから、マリアが指差したところへと歩き出す。だが、二、三步進んでから立ち止まって、マリアを見るために振り返った。

『おじい様』って、貴方もしかして……』

少女は歩み寄って、マリアの顔を覗き込む。あまりの迫力に、マリアは壁へと仰け反っていた。

「帝の唯一の直孫である、三千院ナギ？——よく見れば、髪の色も紫子に似ているし」

「……はい？」

聞き覚えのない名前に、マリアは当惑した。もしかしたら彼女は、過去に一度はその名前を聞いたことがあったのかもしれない。しかし、そのようなことはあまり重要ではなかった。

今の彼女が癪に障っていることは、名前を間違えられていることであつたのだから。

「違います！ 私はナギという娘ではありません。『マリア』というおじい様から頂いた立派な名前があるんです」
「あらそう、それは残念ね。せつかく、帝の孫が見られると思っていたのに」

少女の素気ない態度が、マリアの神経を逆撫でする。目を鋭くさせて、マリアは敵意を剥き出しにさせた。こめかみにある血管は浮き出っていて、彼女の怒りの度合いが深刻であることを示している。マリアは不快感をあらわにして、少女の言動を糾弾した。

「それよりも。あなた、ちよつと失礼ではありません

か？」

「失礼？」

「そうです。私ならともかく、おじい様や紫子様まで呼び捨てにするとは、目上の方に対して尊大ではありませんか？」

「尊大、ね」少女は口内で呟くと、薄ら笑いを浮かべた。

『大きく尊んでいる』のなら、褒め言葉じゃない」

「……そんな意味合いで言つたつもりはありません」

マリアの返しに、少女は目を丸くさせた。それから、彼女は吹き出して笑い始める。

「あなた、聡明ね」

「……へ？」

突然の彼女の褒め言葉に、マリアは拍子抜けしてしまった。彼女の中で膨れ上がっていた怒りはすっかり萎え、今では半ば呆然としている。

そのような状態のマリアを見て、少女はもう一度笑った。

「だって、『尊大』の意味と『尊ぶ』の意味をよく理解しているもの。その年でその知識量は立派だわ。貴方なら、いつか同じ学び舎で机を並べることになるのかもしれないわね」

「そんな、毎日勉強しているからです」

少女の予想外の高評価に、マリアは恐縮する。

「あと、誤解してほしくないのだけど。帝のことを呼び捨てにしているのも、当主という立場上仕方ないことなのよ」

「とうしゅ……?」

「貴方なら、いつか同じ学び舎で机を並べることになるのかもしれないわね。——では、またの機会に」

会話を一方的に打ち切って、アテネはマリアに背を向けて歩き出した。少女の行動に呆気に取られていたマリアであったが、少女の名前を聞こうと呼び止める。しかし、少女は既に人混みへと紛れ込んでおり、その声が届くことはなかった。

ならば、とマリアは少女に追いつこうと走り出す。マリアの視界には、人と人の合間に見える金色の髪しか捉えていなかった。先鋭化された意識は、時として視野狭窄を招く。

「キヤツ！」

マリアは横合いから歩いてきていた女性に気づかず、そのまま衝突した。小さな悲鳴を上げて、ぶつかった弾みで尻餅をつく。

「だ、大丈夫？」女性慌ててマリアに尋ねる。「頭とか打ってない？」

「はい、大丈夫です。こちらこそすみません」

女性から差し伸べられた手を取って、マリアは身体を起こす。その時、しゃがみこんだ女性と目が合った。女性の瞳は緑色で、シャンデリアの光が瞳に宿って、翡翠のごとく光り輝いているようにマリアには見えた。

「ごめんね。私、あまり周りを見なくて。よく、お父様にも怒られるんだけど」

「いえ、私も周りをよく見ていませんでしたので」爛漫の笑みで、女性はマリアに謝る。端正な顔立ちでありながらもあどけなさが抜けきれていない柔和な笑顔は、美人より可憐と形容するに相応しいとマリアに思わせる。

「でも、人って前にしか目がついていないから、周りを見るためにはずっと顔を動かさなくちゃいけないんですよう？」

女性は右手を自分の額に当てて遠くを眺める仕種をして、キョロキョロと辺りを見回した。

「周りを見るためだけにこんな動きをしている人、私は見たことないよ。みんなどうしてるんだろう？」

「あの……『周りを見る』というのは、『周りに気を配る』という意味なのではないでしょうか？」

「気を配る？ 気功を習得するということ？」

多弁な女性に対して会話の楔を打ち込もうとしたマリ
アであったが、「周りが見えない」彼女には何ら効き目が
なかった。さらに、言葉の意味をそのまま受け止める女
性に対して、マリアは少しばかり辟易していた。どのよ
うに説明すれば良いかと思考を巡らす。

その時、女性が羽織っている紫色のストールにマリア
の目は留まった。そして、そのストールを覆うように広
がっている女性の髪に釘づけになってしまった。

その髪の色は、マリアの髪より若干淡い栗色だった。

先ほど出会った金髪の少女との会話を思い出す。もし
かして、という考えがマリアの脳裏を過ぎった。

「もしかして、貴方はゆ——」
「——とところで」

マリアから話を切り上げたつもりが、女性はそれすら
も切り上げて話題の転換を図った。唐突な出来事にマリ
アは口を噤んだ。女性はマリアの顔をじつと見据える。

「周りを見る限り、あなたは一人でいることになるけど、
迷子かな？」

「えっと、そんなところですよ」

「お父さんやお母さんは？」

「それは……」

女性の何気ない質問は、マリアをうろたえさせるのに

十分すぎる意味を持っていた。目を白黒させたまま、マ
リアは押し黙ってしまった。

そんな彼女の様子を見て、女性はどこか違和感を覚え
た。一人で会場に来るわけがないし、両親については頑
なに口を閉ざそうとする。

そこから導き出される結論は後回しにした彼女は、天
使を連想させるような笑顔で再度質問した。

「じゃあ、ここには誰と来たの？」

「——ク、クラウス！」

クラウス。マリアが振り絞って出した言葉を、女性は
呟く。人差し指を顎に付け、目はくるりと回しながら考
え込んでいる様は、イタズラを仕掛けようと企む子供の
ようだった。

「——ああ！ クラウスね、クラウス」女性は手を打っ
た。「今、ここに呼ぶね」

「いえ、クラウスさんは今、別の用があつて……」

マリアの制止を聞き流して、彼女は立ち上がって大き
く息を吸い込んだ。

「ピンポンパンポン」

女性が口から出した音は、デパートでありがちなチャ
イム音を真似たものだった。その音で、マリアを始め周
りにいる人たちが一斉に女性を見る。音自体が場にそぐ

われないものであったからというのものもある。だがそれ以上に、彼女の声は清水のように澄んでいて、清流のように淀みのないものであった。

女性はもう一度息を吸い込み、続ける。

「本邸からお越しの蔵臼征史郎さん。娘さんをお預かりしています。至急、こちらまで——」

「——何をなされているのですか！ 紫子様！！」

女性——紫子の背後から、駆けつけてきたクラウスが怒鳴り声を上げた。息を僅かに切らせていて、顔からは数粒の汗が滴っている。

「あ、クラウス。思ってたよりも早く来てくれたね」

『『思ってたよりも』ではありません！ 何ですか、あの呼び方は。もう少ししまともな呼び方があったでしょう』

「ああでもしないと、クラウスは来てくれないかなと思つたから。……これでも、結構恥ずかしかったんだぜ」

「だったら、最初からなさらなくて下さい」

グッと親指を立てる紫子に、クラウスは頭を抱えた。

二十数年前に彼女の専属の執事として勤めていた頃の苦悩を、彼は頭の中で思い起こしていた。

二人の掛け合いをオロオロしながら見ていたマリアが、ここでようやく口を開く。

「クラウスさん。この方が紫子様ですか」

「あ、ごめん。まだ、名乗っていなかったね。私は三号院紫子。今日のパーティーの主役よ」

「私はマリアと申します。おじ——帝様のところでメイド見習いとして勤めています」

紫子は座り込んでマリアと握手する。紫子の右手を両手で包むようにマリアは握った。絹を纏ったような白い紫子の手に触れたマリアは、とても冷たい感触を覚えた。「ところで、紫子様。本日はお誕生日おめでとうございます」クラウスは襟を正す。

「うん、ありがと。——ところで、プレゼントは？」

紫子の一言で、クラウスの顔からどっと汗が噴き出した。彼は、プレゼントのことなど完全に失念していた。

「まさか、用意していないとか？」

「いえ、違うんです。ただ、手続きとかを済ませていないくて」

「手続き？」紫子は首を傾げた。「何を渡すつもりなの？」

「あ、あれです。二十数年前に頂いたアパート、ムラサキノヤカ——」

「……クラウス」

紫子は一度ため息を吐いてから、クラウスに人差し指を突きつける。

「プレゼントは贈り物であって、お返しするものじゃない

いの。分かる？」

「——またの機会に致します」

「そうそう。それはまた、別の機会に」

紫子は話に一段落をつける。それを境に、マリアがクスクスと笑い始めた。二人は不思議そうにマリアに視線を注ぐ。

「あつ、失礼しました。あれだけ振り回されているクラウドスさんを見て、つい……」

笑いを止めたマリアは、丁寧に謝した。その後、堪えきれずに再び笑い出す。

紫子も彼女に同調して、声に出して笑い始めた。

「正直なことを言うと、別にプレゼントなんて要らないの。この日を祝ってくれる、パーティーを開いてくれるだけで十分だから」

会場を眺めながら、感慨深げに紫子は呟いた。此処彼処で繰り広げられている話題は、決して彼女にまつわるものだけではない。だが、会場内の雰囲気は照明に劣らないほど明るく、それだけで紫子は一つの満足を手に入れることができた。

「それよりも、クラウドスのデリカシーのなさが問題ね」

紫子は笑いを止めた。「今年で何歳？」

「はあ、ちょうど五十歳ですが」

間の抜けた声でクラウドスは応える。

「そっか、もう五十か……。それでマリアちゃんのような娘だと、結婚も遅かったのね。まあ、孫だと考えることもできなくはないけど」

「あの……紫子様」

一人語りで様々な可能性を憶測する紫子に、クラウドスは声をかけた。

「そもそも、マリアと私は血が繋がっていません。私は独身であるから、彼女の面倒を一部見ているのです」

「え、面倒を一部見ている？ ご両親は？」

「いません。——というよりも、分からないと言ったほうが正しいと思います。彼女は、生後間もなくしてマリア像の前に置かれていました。ですから、本当の両親も、本当の名前も一切知らないのです」

クラウドスの説明に、マリアは頷いた。

紫子はマリアの顔を心配そうに見つめている。さらっとクラウドスは説明したが、冷静に考えれば悲惨な過去である。それでいて、物静かに頷くマリアを見て一抹の不安を感じた。

「親を知らないなんて、寂しくないの？」

思わず、紫子は声に出した。マリアはそれに笑って答える。

「寂しくないと言え、嘘になります。ですが、おじい様が本当の親のように育てて下さっていますから」

「クラウス……」

紫子はマリアからクラウスへ顔の向きを変えて、神妙な面持ちで見つめた。ジト目で見つめる彼女の表情は、クラウスの顔を強ばらせた。

「あまり、マリアちゃんに好かれていないのね」

「……精進します」

言葉を少なくして、クラウスは答えた。が、その反省の弁を紫子は耳にせず、少し俯いて腕を組みながら考え込んでいる。

彼女にしては珍しく考えているな、と失礼な感想を抱いたクラウスはその様子を見守ることにした。

「――決めた」紫子が口を開く。「マリアちゃん。将来、私の娘の面倒を見てくれない？」

突然の申し出を受けたマリアだけでなく、クラウスまでも目が点になった。見ず知らずの人の面倒を見るといっお願いをされて、マリアは慌てふためいている。クラウスはそんなマリアの様子を鑑みて、彼女の代わりに紫子に尋ねた。

「あの、理由だけでも伺ってよろしいですか？」

「それは……テラスで言うわ。その方が、説明しやすい

し」

紫子は踵を返して歩き始めた。クラウスはマリアの背中を軽く叩き、紫子の後をついていくことを促す。マリアはクラウスに少し遅れて、テラスへと歩いていった。



テラスは南側に面していて、屋敷から突き出るように設計されていた。大理石で造られた欄干はテラスの外周に沿って弧を描くように設置されている。欄干に手をかけて少し身を乗り出せば、百八十度以上の視界を確保することも可能であった。

このテラスは、展望台の役割も兼ね備えていた。欄干の上に手を置いた紫子は、満月の浮かぶ夜空を見上げている。

満月は、地表にあるものを遍く照らし給う。

眼下に広がる森であろうが。森の先に見える荒野であろうが。そして、さらにその先にそびえ立つ山脈であろうが。

月は地上を俯瞰して、分け隔てない光をもたらし続けている。

しかし、「その月にも気まぐれはあるのかな」と、紫子

を後ろから眺めていたマリアは思った。

紫子の髪に降りかかっている月の光は、そのまま溶け込んで艶やかにさせているように見える。そして、燦然と輝いていた。

満月は、テラスという舞台にあてがわれたスポットライトの一つに過ぎなかった。神に愛されている彼女の前では、月でさえ引き立て役に成り下がっていたのだ。

穏やかな風が、テラスへと吹いている。その風は、紫子の腰まで届く長い髪を揺らし、ストールをはためかす。

「くしゅん」

閑静な中に似つかわしくない音を聞いて、紫子は振り返った。

小さなくしゅみは、マリアの口から発せられた。咄嗟に出た生理現象に、マリアは赤面する。彼女は冬空の下でも気丈に振舞うつもりであったが、くしゅみを切欠として掌を擦り合わせ始めた。時々掌に息を吹きかける様は、寒さを凌ごうと必死になっていることを裏付けている。

「ごめんね。ドレス姿なのに外に連れ出しちゃって」

マリアの傍へと行って、紫子は彼女の肩に自分のストールをかけた。

「気休めにしかならないけど」

「いえ、そんな、……ありがとうございます」

突然のことに戸惑いを隠せなかったマリアだが、紫子の笑顔を見て彼女の計らいを受け入れた。

「それで、どうしてテラスまで出たのですか？」マリアの隣にいたクラウスが問いかけた。

「それはね、——あれを見て」紫子は満月を指差す。

「月、ですか？」

「違う。月から右の方に、白く光る星があるでしょう？」

紫子は夜空に突きつけた指を右に振る。月の明かりに負けた星々が夜空に姿を見せない中、クラウスは満月の近くにあつて白く輝いている星を見つけた。

「シリウス、ですか」

「そうそう、それよ、それ。母の星として娘のナギに教えたつもりだったけど、一度だけ指し間違えた時に、『それはアルクトウルスだ』なんて言ってきたね。当時四歳だったあの子の賢さといったらさ……」

くどくどと話を続ける紫子をよそに、クラウスはシリウスを凝視し続ける。クラウスは、あえて『母の星』とやらにはツツコミを入れなかった。

「それで、その『アルクトウルス』とやらはどちらにあるのですか？」

「確か赤く光る星だったから、近くにあったような気が

するんだけど……」

紫子は手当たり次第に夜空を指差し続けた。「白く輝く星と赤く光る星をなぜ指し間違えたのか」などという野暮なツッコミが、クラウドスの喉元まで出かかっていた。しかし、それもあえて飲み込んで、クラウドスは一緒になつて『アルクトウルス』なる星を探し始めた。

「何をされているのですか？」

寒さに慣れ始めたマリアは、二人に尋ねた。彼女からすれば、夜空に向けて指を突きつけている光景が滑稽に見えた。

「マリアちゃんも探してもらつていい？ 赤く光る星で『アルクトウルス』つて言うんだけど……」

「それは、無理です」マリアはきっぱりと言い切つた。「アルクトウルスは、この夜空にありませんから」

哑然とする二人をよそに、マリアは欄干に手を掛けて背伸びをする。そして、視界に捉えたシリウスを指差した。

「おおいぬ座のシリウスという星は冬の大三角の一角を成しています。つまり、冬を代表する星です。それに対して、牛飼い座のアルクトウルスは春の大三角の一角を成しており、また、春の大曲線の一部にもなっています。つまり、春を代表とする星です。今は冬ですから南の空

にシリウスを眺めることができませんが、同時に春を代表とする星であるアルクトウルスを眺めるのは不可能といつても良いでしょう。仮に——」

マリアは一呼吸してから、東の空を指差した。

「今の時期にアルクトウルスを見たいのでしたら、夜明け前の東の空となります。それ以降は太陽の光に負けてしまつて、見ることはできません」

最後に、マリアは紫子へと視線を移した。

「ですから、今の時間にアルクトウルスを探せと言っても、無理なのです。非科学的で有り得ないことなのです」饒舌に語つた後、マリアは紫子の反応を窺つた。紫子はクラウドスへと視線を向ける。

「紫子様。生まれは違つていても、マリアは三千院家の子供として英才教育を施されました。帝様直々に、です。」クラウドスは肩を竦めた。彼自身もマリアがあそこまで

賢いと知るのは、初めてだった。

「凄い！ 凄いわ、マリアちゃん！ とても賢いのね！」

紫子はマリアの頭を撫でた。「決めた。この子をナギの家庭教師にする」

「家庭教師、でありますか？」

クラウドスの疑問に、紫子は目を輝かせながら答えた。「そうよ。賢さでは周りに敵なしと思つているナギを、

マリアちゃんが家庭教師として付いていてもらうの。そうすれば、ナギは上には上がいることを理解して、きつとひねくれた子なんかには育たないわ。——大丈夫。マリアちゃんの知識なら、ナギには負けないと思うから」

紫子はマリアの両肩をポンポンと叩いて、期待の現れであることを示した。マリアはわけも分からずに、ただただ紫子の顔を見ていた。

「じゃあ、早速。明日からナギの家庭教師として——」

「ダメです」

「……ちよつと、クラウスには聞いてないの」

水を差されたような気がして、紫子は口を尖らせた。主の不興を買ったにもかかわらず、クラウスは毅然とした態度を保っている。

「マリアを家庭教師にするのは、今のところは無理です。三千院家の者は高校を必ず卒業すべし、という帝様の方針があるからです。無論、ナギお嬢様も例外ではありません」

「じゃあ、マリアちゃんがナギの家庭教師になるまで、十年はかかるってことになるじゃない」

「正確には、九年と三ヶ月ほどです」

「そこまで待てないわよ」

縋るような目で紫子はクラウスを見つめる。クラウス

は静かに首を振った。

「じゃ、じゃあさ。若くして高校を卒業すれば良いのよね。飛び級制度とか利用して……」

「日本に、飛び級制度はありません」

「無いのなら作れば良いのよ。そこは、お父様に頼んで……」

「今からその制度を作ろうとしても、最低で数年はかかります。お金だけで解決できる問題ではありません」

「もう！ いちいち正論で返さないでよッ！」

それは、紫子が初めて二人に見せた激昂だった。金切り声に近い叫び声でクラウスを詰る姿は、彼でさえ予想だにしていなかった。紫子の傍らにいるマリアは、おどおどして事の推移を見守っている。

しかし、その中にも、クラウスは目ざとく紫子の別の異変を掴んでいた。

「紫子様、何を焦っておられるのですか？」

クラウスの言葉で、紫子の表情が憤りから恐怖へと一変した。瞳孔は収縮を繰り返し、齒はカタカタと音を鳴らしている。

——何かを隠している。クラウスの直感はそのように告げた。彼は、畳み掛けるように質問をする。

「体調は芳しくなかったと、帝様から伺っております。そ

れでいて、どうして早くに結果を求めるような行動を取られるのですか？」

「それは、私には——」

紫子は振り向いて、テラスの欄干に左手を置いた。そして、右手を口元に当て、大きく咳き込んだ。

紫子の肩が、咳き込むたびに上下に動いている。異変に気づいたクラウスが、紫子の元へと飛んでいった。彼は紫子の背中を右手でさすり、発作を落ち着かせる。

「大丈夫ですか、紫子様」

「——大丈夫よ。いつものことだから」

口許を押さえていた手を下ろし、紫子は穏やかな笑みを浮かべる。その笑みを見て、クラウスは安堵した。

が、彼の表情は、マリアの震えた声によって急変する。

「クラウスさん。紫子様の上に、その——」

クラウスの目から逸らすように下ろされていた紫子の右手は、彼女のすぐ後ろにいたマリアの目に捉えられていた。

その掌は、真っ赤な血に塗れていた。

「マリア！ 帝様を呼んで来てくれ！」

クラウスは紫子の手首を掴んで血が付着していることを確認した後、マリアに指示を飛ばした。しかし、マリアは足がすくんで動けない。彼女の顔は青ざめていて、

引きつっていた。声に生じたことから始まった震えは彼女の全身に伝播し、今では紅い瞳までも小刻みに揺れている。

「——早く！！」

「は、はいっ！」

クラウスの一喝に突き動かされて、マリアは会場へと走り出した。彼女が会場の中へと消えていったのを見届けた後、クラウスは水玉模様のハンカチを取り出して、紫子の手についている血を拭き取り始める。

「体調が回復されたのは、嘘だったのですね」

クラウスの問いかけに、しかし紫子は答えなかった。目を伏せたまま、彼女は沈痛な面持ちで黙秘を続けている。

「どうして、そんな嘘を吐いたのですか」

クラウスは重ねて質問する。その声には、僅かながらの怒気ははらんでいた。

「それで悲しまれるのは——」

「もう一度だけ……」

紫子の口から絞り出されたかすかな言葉は、クラウスに叱咤することを止めさせた。彼女の言葉に耳を傾けることが最善だと彼は考えた。

「もう一度だけ、私に嘘を吐かせて」

「ですが——」

「……お願い」

弱々しい言葉とは裏腹に、紫子の右手はクラウドの上着の裾を力一杯握りしめていた。

クラウドは嘆息する。

「分かりました。紫子お嬢様がそのように仰るのならば」
クラウドは紫子の右手を包み込むように持って、上着から手を離させた。そして、その上着を脱いでテラスから外へと投げ捨てた。

空を舞いながらも、確実に落ちていく白いスーツ。その裾には、紫子の指と指の間に残っていた血が、斑模様となつて刻み込まれていた。



「おじい様、こちらです！」

「分かった。分かったからあまり引つ張らないでくれるか？」

帝の片腕を掴んだまま、マリアはテラスへと躍り出た。為されるがままに連れてこられた帝は、手で膝をついて息を切らしていた。息が上がりながらも、帝は衰えを見せない眼力でクラウドを睨む。しかし、クラウドは一切

怯むことがなかった。

「どうしたんだ、クラウド。……というか、上着はどうしたんだ？」

「酔いが回って身体が火照ってきまして。着ているのが億劫になったのです」

クラウドは、飄々とした風体で主に嘘を吐く。

「なら、構わんのだが。で、何の用だ？」

「実は、紫子様から帝様にお問い合わせがあるので」

クラウドは一步引いて、紫子に場所を譲った。紫子は一步前に出て、たおやかに一礼する。彼女の顔は青白くなっていたが、そのような些細な変化は月の光に上塗りされてしまっていて、傍にいるクラウドでさえも気づいていなかった。

「実は、お父様にお問い合わせがあります」凜とした声で、紫子は話す。「白皇学院に飛び級制度を設けて欲しいのです。理事の一人であるお父様なら、出来ると思っています」

「別に構わんが。——というか、既にその方向で話は進んでおる」

「本当に？」思ってもみなかった返答に、紫子は反射的に聞き返した。

「ああ。今日も天王州家の当主と相談していな。ほとんどの根回しは終わったから、再来年には運用できるだ

ろう。そもそも、早く理事長に天王州家の当主を据えるためのものだからな」

帝は不敵な笑みを浮かべた。

「凄い！ お父様ってやっぱ凄いわ！」

嬉々とした表情を見せる紫子。それに対して、クラウドとマリアは内心驚いていた。全て、紫子の思惑通りに動いてしまっているのだ。

特に、マリアの動揺は一入であった。紫子の容態が悪化したから帝を呼びに行ったはずなのに、そのことを告白するわけでもなければ露見するわけでもない。

腑に落ちない、とマリアは強い意志を込めてクラウドをキツと睨んだ。

——クラウドは静かに首を振った。その行動だけで、賢い少女は察してしまった。

「それよりも、体調は大丈夫なのか？」帝は心配そうに尋ねる。「寒いところにいると、身体に害だぞ」

「心配無用よ。体調は良くなっているわ」

紫子はその場でターンして、胸を張った。愛娘の威風堂々とした様を見て、帝は哄笑した。

「いや、マリアがお前のストールを持ってきた時には、一瞬ヒヤツとしたぞ。だが、その様子を見る限り安泰だな」

帝が大笑いをしている隣で、マリアは苦笑する。クラウドが時折目で彼女を制していたのもあるが、マリア自身もその場の空気に適応していた。

幼い子供に共犯者の片棒を担がせたことに、クラウドはいくばくかの罪悪感を覚える。

「じゃあ、ワシはまだまだお偉いさんと話すことがあるから、中に戻るぞ」

帝は身体を翻して歩き出した。顔だけ振り向いて、彼は柔和な笑顔を作る。

「紫子。他にもお願いしたいことがあるなら、遠慮せずにくらでも言いなさい。今日は、お前の誕生日なんだから」

帝が見せた笑顔は、掛け値なしに子供を案じる父親のそれと何ら変わらなかった。



帝が会場に戻ったのを見届けてから、紫子はよろめいた。とっさに反応したクラウドが彼女の身体を支える。負担を増やさぬようにと、クラウドは柔軟な動きで両手の位置を調整させている。

しかし、その手は微かに震えていた。

「どうして、あのような嘘を吐かれたのですか」

「私が血を吐いたことがお父様に知られると、心配するでしょう？　もしかしたらパーティーも中止に——」

「そちらの嘘ではありません！」クラウスは紫子を叱った。「どうして、体調が回復されたという嘘を吐かれたのですか！」

真摯なクラウスの視線から目を逸らし、紫子はクラウスを押し退けて立ち上がる。そしてそのまま、空を眺めていた。

「今年が、最後のチャンスだったから」

「チャンス？」紫子の呟きに、マリアが聞き返した。

「そう。お父様は優しすぎるの。体調が悪いという理由だけでパーティーを開いてくれない。だから、体調が良くなったと嘘を吐くしかなかったの」

「それは……。帝様の気持ちをお察し下さい。貴方は大事な帝様の一人娘ですから」

振り返った紫子は、クラウスを真っ直ぐな目で見据える。裏表のない純粋な眼差しに、クラウスはたじろいでしまった。

「私にもね、居るの。大事な一人娘が。物心つく前に父親を失い、物心ついた頃には母親が苦しんでいる、そんな境遇を今まさに経験している子が」

両手を胸に当て、目を閉じながらそっと、紫子は自分に言い聞かせるように口に出した。

「それが、ナギという娘なのですね」

「そう。その娘の為だけに、このパーティーを開いてもらったようなものよ」

——どこか、矛盾している。

紫子の言葉を聞いていたマリアは、心のどこかに引っ掛かりを覚えていた。自分の体調を蔑ろにしてまで、子供のために何かをする必要があるのだろうか。それで親が倒れてしまっただけ、最も悲しむのはその子供ではないのだろうか。

マリアの心の中でわだかまりができつつある中でも、紫子の演説は続いていった。

「このパーティーのおかげで、ナギに親友ができたの。鷺ノ宮家の初穂ちゃんの娘で、伊澄という娘なんだけど。すっかり意気投合しちゃって今では一緒に寝ているわ。」

それに、将来の家庭教師になれるマリアちゃんとも出会えたし、そのための飛び級制度もあと少しでできる。——本当に、嘘を吐いて良かったと思っているの」

「何を仰いますか！　ご息女の親友など将来、いくらでもできますよ。まずは、ご自分のお身体を心配なさってください！」

「——ねえ、クラウス」

感情を爆発させたクラウスに、紫子は淡々と語りかける。彼女は目一杯の笑顔を浮かべた。

「心配したら、私の病気は治るのかな？」

「それは……」

無邪気な表情から放たれた無慈悲な問いかけが、クラウスの胸に突き刺さる。

「もう一度聞くよ。心配していたら、私の病気は治るの。クラウス？」

クラウスは顔を歪ませた。唇はわなわなと震えている。握り締めた両拳から幾筋の血が流れ、テラスの床に紅い飛沫を描いていった。

「答えたく、ありません……」

それが、理性と本心の葛藤で苦しんだ男の、絞り出した唯一の答えだった。

「ごめんね、クラウス。本当に、ごめんなさい……」

二人の応酬をじっと見つめていたマリアは、紫子の問いかけとクラウスの変化で、彼女の言わんとすることを理解できた。だが、到底納得できないからこそ、マリアは尋ねた。

「どういふことですか、クラウスさん、紫子様？」

「マリアちゃん。私の病気はね、治らないの。どれだけ

お金を積んでも、ね」

「お金持ちへの皮肉かしら」とニヒルに笑う紫子を見て、マリアの心の中にあつたわだかまりは消えていった。消えていった後、何も残っていなかった。

「だから、残りの時間を自分のためではなく、最愛の娘に捧げようと思ったの。私がいなくなった後、あの娘には莫大なお金が残るわ。でも、お金ではあの子を守ることができても、癒すことはできないから」

「私が証明ね」とクスクス笑った紫子を、マリアは直視し続けた。常に子供のことを考えて行動した母親の姿を、マリアは見たことがない。自分の身体をも厭うことなく子供の将来のためになげうつ紫子の姿は、マリアの中で自然と美化されていった。

その美化が、マリアの無神経な一言に繋がってしまった。

「子供のことをしっかりと想っているなんて、紫子様は立派なお母様なのですわ」

紫子は絶句して、振り返った。今度は空——よりも高い天を仰いだ。

「マリアちゃん。私はね、立派なんかじゃないわ」

再び振り返って、紫子はマリアに顔を見せる。その顔を見て、今度はマリアが言葉を失った。

紫子は、泣いていた。潤んだ瞳から溢れた雫が、頬を伝っていく。そして、彼女は両膝を地面につけて、立ち竦んだままのマリアの首に両腕を回した。

「私はね、自分のことはもう諦めてしまっているの。お父様は常に、私の病気が治るように努力しているのにな。——こんなことをナギが知ったら、とても悲しむわ。それだけ、私が吐いた嘘は罪深いの」

嗚咽を漏らしながら、紫子は諭すような口調でマリアに話しかける。マリアの瞳からも、涙が溢れている。その涙はきつと、後悔からくるものであった。

「それでも、私のお願いを聞いてくれるかしら？ 一生のお願いになると思う。両親の愛情を知らない貴方だからこそ、両親を失ったナギを支えられると思うから」

マリアは、ただただ頷いた。言葉にできなかつたものがあるが、返答するのに言葉にする必要もないお願いであったからだった。



あれから、九年の月日が流れた。

海に面した崖の上にある十字架を模した墓の前で、少女は祈りを捧げていた。水平線へと沈んで行く夕陽に照

らされている中で、少女は片膝を地面に着けながら両手を組んで一心に祈っていた。

冬の代名詞でもある北西の季節風が、眼を瞑っている少女の目蓋を粗雑に撫でながら通り過ぎていく。遮るものがない中で吹き荒れるこの風は、僅かに潮の香りを含ませて彼女へと襲いかかっていた。

金髪のツインテールが、柳のように風になびいている。そして、手を組むことで互い違いに噛み合っている少女の白い指は、紅葉のように赤く染まっていた。

しかし、少女——三千院ナギは、寒さを嫌がることなく、弱音を漏らすことなく、常に笑みを浮かべていた。

「今日が、紫子様の誕生日だったのですね」

少女の背中から十メートル離れたところで、二人の間が彼女を見守っていた。その内の一人である綾崎ハヤテが、ナギの後ろ姿を見つめながら呟いた。

「そして、ナギにとっては、命日以上に大切な日なのでしよう。紫子様が生まれていなければ、ナギも生まれていなかったのですから」

ハヤテの隣に立っているマリアは、ナギの後ろ姿に目を細める。

普段の彼女であったならば、風をともに浴びるだけでよろめいていただろう。それ以前に、「なぜ寒いと分か

っているのに、外へ出なければならぬのだ！」と言って風から逃れようとしていたに違いない。

しかし、今の彼女は、そのどちらでもなかった。まるで足から根を生やしているかのように微動だにしていな。ナギにとって母である紫子の存在がどれほど大きかったのかは、その後ろ姿が物語っていたのだ。

「本当に、お母様が大好きだったのですね」

「ええ。——私も大好きでした」

マリアの一言を聞いて、ハヤテは彼女に顔を向ける。

髪は黄褐色に染まりつつも、髪と同じ色の瞳は変わることなくマリアの顔を捉えていた。

「マリアさんも？」

「ええ。九年前の今日この日、たった一度だけしか会っていませんけど……」

「一度だけ、ですか？ もっと会っているものだと思いますが」

「確かにそうかもしれませんが、私とあの人の人にとっては、そのたった一度だけで十分だったのです」

マリアは目を閉じて、首の後ろに右手を這わせる。彼女が感じ取ろうとしていたのは、紫子の両腕が首に回った時の感触であった。

それは、凍てつく風に晒されているものとは完全に異

なる感触だった。仮にあの感触が風によるものであったのならば、肌は乾燥していたことになる。

しかし、あの時の彼女が感じていたものは、そのようなものではなかった。まるで、溶けかかった氷に触れているかのように、冷たい中にも肌が潤っていく様を彼女は感じていた。

マリアはおもむろに目を開けて、そのまま正面を見据えた。

「ナギの家庭教師になってほしいと、あの人は、私にお願いをしました。病状の悪化を偽って、時には吐血しながらも気丈に振る舞ったりしていました。全ては、愛娘であるナギのために」

崖に打ち付けられる波の音が響き渡る。風切り音がはつきりと耳にできるほどの沈黙が、二人の間に流れた。

ハヤテはバツが悪そうに頭を掻いた。彼の見つめている美人の横顔には哀愁が漂っている。

このまま話題が止まってしまふのはよろしくない、彼はそう判断してニコリと笑みを浮かべた。

「僕も、紫子様に一度だけお会いして、お嬢様のことを頼まれました」

ハヤテの唐突な一言に、マリアの目は見開かれた。彼女は訝しげにハヤテを見やる。うなじに置かれていた右

手は、ハヤテの額へと移っていた。

「大丈夫ですか？ 具合の悪いところとかはありませんか？」

「いや、熱とかありませんから……」

ハヤテはそんなマリアを見て戸惑いを覚えつつも、マリアの右手を掴んでそっと下ろす。そして、顔の向きを正面へと戻しナギの背中を見つめて言葉を続けた。

「前にここへ来た時に、夢の中で言われたんですよ。『ナギのことをよろしくね』と」

自分の口から夢という言葉が出てきたことに気づくと、ハヤテは「あ」と間抜けな声を出した。そのまま横を向いて恐る恐るマリアの様子を確認する。案の定、マリアは肩を小刻みに震わせていた。

彼女は『非科学的なことは有り得ない』と断ずる人であった。会ったこともない人が夢に現れて頼み事をするというのは、突飛であり非論理的な話でもある。

「そうですね。紫子様がそのようなことを仰っていたのですか。——夢の中で」

笑いを噛み殺して言った後、堪えきれなくなったマリアは声を出して笑い始めた。決壊したダムのように、一度理性を振り切った感情は留まることを知らない。ついには、腹を抱えて笑い始めた。

「そんなに笑わなくても良いじゃないですか……」

「いえ、あまりにも可笑しかったから、つい……」

「……では、僕はお嬢様の様子を見に行きます」

居たたまれなくなったハヤテは、一言マリアに告げてから歩き始めた。その後ろ姿は普段よりも小さく、がっくりと両肩を落としている。彼女の反応は想像できていただけに、受けたショックもまた大きいものであった。

ハヤテはナギの元へ歩み寄り、微笑みながらナギの両手を握った。ナギは顔を背けて頬を赤色に染める。彼女の顔が赤味を帯びているのは、夕日のせいでも、ましてや寒さのせいでもないのだろう。

マリアはひとしきり笑った後、目を細めながら墓の前にいる二人を眺めていた。そして、ひとりごちた。

「そうですね。あの人は夢にまで出てきてナギのことを頼んだのですね。一生という概念すらも越えて」

マリアは二人に背を向けて、これから月が出てくるであろう東の空を見上げた。

そして、思い浮かべたのは、満月の下で受け入れた、一生の願い。

著者あとがき & メッセージ

【RIDEさん】

どうでしたか？

キヤラが自分の作品を見てそれぞれ感想を言う、というのはどこかであるような気もしますが…なんにしろ、楽しんでいただけたら幸いです。そして他の皆様も執筆ご苦労様です。最後に、この企画を実行してくださった双剣士さんに感謝のご気持ちを。

【みっちょさん】

どうも！初めまして！！

このたび特別枠として合同本に参加させていただきました
みっちょと言うものです！

駄文ですが今回の合同本で私の作品が少しでも「おもしろい」と感じていただけたら幸いです！
サイトも今年初めて作りました！

<http://id12.fm-p.jp/444/soranokago/>

ハヤヒナを中心として他のアニメもやっています！

ぜひ一度遊びにきて頂けると嬉しいです！！

【彗星さん】

止まり木合同本の公開おめでとうございます。

ひなたのゆめが機能しなくなってから早数ヶ月。双剣士さんのおかげで作品の公開する場所を失わずに済み、更には合同本に参加させていただくことができました。そして、その合同本も双剣士さんのお力に頼るばかりで本当に感謝の言葉が尽きません。この場を借りてお礼を申し上げさせていただきます。

本当にありがとうございます。

合同本の方も、これっきりになるのではなく、二回三回と続けられるよう、微力ではありますが私も止まり木サイトの方を盛り上げて行きたいと思えます。

さて、一通り謝辞を述べたところで本題の作品に関して。

今回再掲という形で過去にひなたのゆめで掲載した『僕の大きな黒い傘』を載せていただきまして。

ジャンルは悲恋モノ、になるんでしょうか。この話を思いついたのは、とあるギャルゲーで女の子が階段を数えながら上るシーンを見て、だったと記憶しています。なにこれ可愛い！ いける！ みたいな。けれど、そのシーンは確かトゥルーエンドのエンディングだった気がするんですよね。どうしてこうなった。

まあ、原因はいくつか考えられるのですが、恐らく私の持つハヤテ君観と申しますか。私のハヤテ君というキャラへの印象が一番大きいんじゃないかと。

私にとつて、ハヤテ君はハヤテのごとく！ という作品において最も流動的な存在です。そして、それが如実に現れているのがミコノス編になります。

彼はミコノス編でアテネと再開し、ナギとアテネどちらかを選択することを迫られます。両方の実を救うことは叶わない。必ずどちらかを捨てなければならぬ。そんな状況の中で彼は最後まで選択することが出来ず、最終的にナギが自らを捨てさせる。このように物語は進行します。

なんとという優柔不断。まさしくキングオブ優柔不断です。選べないのはまだしょうがないにしても、最終的に四つ下の女の子に背中を押されてるわけですから。まあ、それもアテネとナギを大切に思うが故。ハヤテとナギの絆の強さがわかる良い場面ではありますが。

しかし、その優柔不断さこそがハヤテ君の優しさであり魅力なのではないでしょうか。優しいからこそ、誰かを傷つけられない。だからこそ、選べない。

原作ではナギの成長ばかり目につきますが、ハヤテ自身が成長するのはいつになるのか。注目です。

と、いうような私のハヤテ君像を形にした作品ですので賛否両論あるんじゃないかなと予想しています。皆さんの持つハヤテ君像と言うのも興味深いので、何らかの形で知ることが出来たらな、と。実はこの続きで、ハヤテ君が未練を断ち切るという話も考えてはいるのですが、書かない方が良いのかな、という気もしています。日の目を見るかは定かではありませんが、その時は皆さんに読んでいただけたら幸いです。

拙い小説、あとがきにお付き合いいただきましてありがとうございます。それでは、この辺で。

【きはさん】

「ひなゆめファン」の止まり木」で私の名前をご覧になった方は、こんにちは。こちらの小説本で初めて私の名前をご覧になる方ははじめまして。「きは」と申します。本作、「一度の出会い、一生の出

会い」は楽しみに頂けて頂けましたでしょうか。分量が多くて読み飛ばしてきた方は、無理をせず、ごゆっくりと読んで頂ければ本望です。

本作のテーマとか諸々の部分は物語の中で散りばめたので、あえて解説などはいたしません。ですが、ちよつとしたコンセプトだけこの場をお借りして語りたいと思います。

コンセプトの根底には、白皇学院の飛び級制度があります。本作では勝手に設定を加えていますが、その部分こそ、私が一番書きたかった部分であったりします。

原作を振り返ってみますと、現在白皇学院の飛び級制度を受けているのは、三千院ナギと鷲ノ宮伊澄、そして剣野カユラです。それに対して、過去に受けていたのはマリアと天王州アテネ、そして、橘ワタルです。(アテネに関しては、バックステージにて言及されています。マリアが卒業してからヒナギクが入学するまでの三年間通っていました。)

さて、これらの人々が飛び級制度を受けるに至った動機はなんだったのでしょうか。原作で明確に示されていないのは、マリアとアテネの二人のみとなるのです。他は、「学校めんどい」とか、「好きな人と一緒に」みたいな動機があったりします。

じゃあ、アテネとマリアの動機を妄想で補おうではないか。というコンセプトで始めたわけですが、ただ、それだけです。ゆっきゅんが吐血することなんざ、当初の予定にはありませんでした(笑)

そんな細かいことを考えながら、他の作品も執筆しています。このお話を通して、興味を持って頂ければ、それは望外の極みであります。

最後に、このような機会を下さった双剣士様を始め、「止まり木」の皆様方、そしてこの本に目を通して下さった全ての方にお礼を申し上げて、あとがきを締めさせていただきます。本当に、ありがとうございました。

きは

編集後記

ひなたのゆめが突然消滅し、後継サイト「ひなゆめファンの止まり木」を開設してから7カ月半。初めての合同小説本をお届けします。今回はクイズ大会の上位景品という形を取ったため参加者は4名・イラストは1枚のみとなります。本当はもう1人が加わる予定だったのですが都合が合いませんでした。

次回のクイズ大会は8月の夏休みに開催予定、出題範囲は「ハヤテのごとく！」単行本の十一〜二十四巻になります。次こそは合同誌に参加したいと思われる方は、張り切って早押しクイズの腕と、期限内に小説を書き上げる実力を磨いてください。

奥付

書名…ひなゆめファンの止まり木・合同小説本 Vol.01
発行責任者…双剣士 (<http://soukenshi.net/mail/>)
発行日…2013年6月3日